浦石のさすり仏（別名さすり石）

渡辺　勝

一

古くからさすり仏（石）と呼ばれ、地区民から親しまれているやや青味がかった石が、徳山市青山町一丁目と松保町八丁目の接する旧国道二号線と市道との交差点ロータリーに祭られている。この石は前には現在地より約一二〇米西方の旧東松原の道端南側に北面して立っていたが、昭和三二年道路拡張により現在地に移されたものである。（第1図）

地元では、この石をさすった手で足をさすると足の病が治るといい伝えられ、又無礼をした人は病気に罹るといわれている。現在地に移転の際にも作業者が高熱を発したとかいわれている。尚、最近では旧東松原自治会で毎年三月一日に、徳応寺住職による供養をしている。

二

さすり仏といわれるこの石仏は、いつ頃からあり何ものであろうか。調査して次の事が明らかになった。

(一) 実在する現物としては、件の立石（西向きに立つ）・敷石および移転時まで埋っていたという石香立二個のみである。（第2図）（写真）

(二) 古老によると、祭神は六部という説が多い。それは昔六部が回国中に足を患い、旧東松原に辿りついた。そして付近の人に看護されながら世を去った。その時足の悪い人は（墓）石をなでた手で足をさすれば治ると言ったと伝えられてきたという。

(三) 『徳山近辺古跡探』によると、

「……大溝あれば、小溝あり。道に背向いの青石は、今裏石と名を得れど、昔三社権現を、何所に勧請なすならば、宣からんとこの石の、上にて占なせし故、卜石とこそ名付たれ。

南に左保の清水あり、比は文禄元年に朝鮮国を攻る迚、数多軍勢向られて、秀吉公の肥前なる、名護屋へ出張給う時、新宮辺の往還は、廻り道故天樹公、左右に松を植さし

て、直なる道を作らしむ。後中道と言し也。……」とある。

(四)　『地下上申』遠石村の隣村境目書の内に「……笹場(葉)が浴頭通り田平川迄尾切ニ下り、夫より田平川境に往還迄下り当村より徳山へ行往還切ニ青石通迄行、夫より田之あぜ切に廻り、又田平川筋を境ニ下り、……」とある。この青石の位置を確かめるため、地下上申絵図を見ると遠石のえぼし石・明星石等は記載されているが、青石は記入されていない。絵図から推算すると、青石通田のあぜ切の位置は、田平川から西約一〇〇mの位置となる。

徳山村の地下上申についても同様に記載されている。

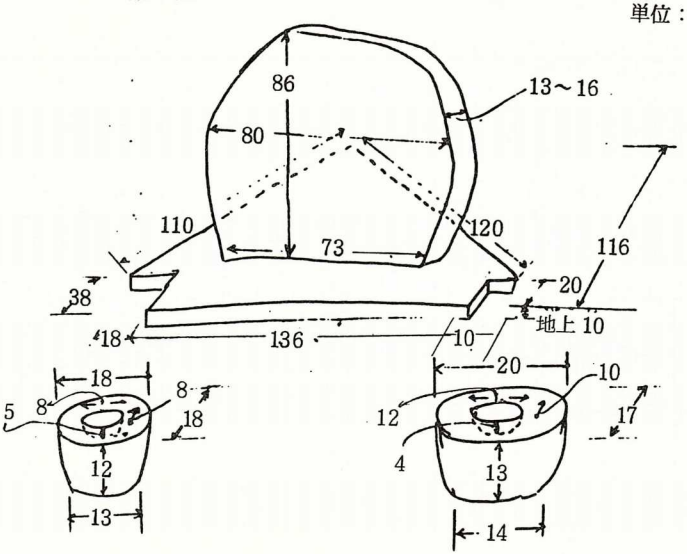
(五)　『徳山藩史』巻之五に、

「亨保十四年巳酉七月十五日徳山浦石往還端ニ有之青石(祈)先月下旬から風と参詣人有之　色々病人致寄願本復者も有之由申触し昼夜ニ　三四百人、或は七八百人程ツゝ参候由、稀有之義急度上から御脳只今迄不被成候得共、往還筋旁難被差置、黒神中務五智輪坊江趣御尋之処、格別之訳も不知、依之散銭代官所脳にして番人昼一人夜二人地下から差出可然よし達被仰付之、散米之内を以　番人壱人別一升宛立被遣之」の記事がある。

第1図

第2図

単位：cm



立石　緑泥片岩
自然石
刻字なし

敷石　岩石名？
矢尖形に加工？
刻字なし

香立　凝灰岩製

三

さて前出の現在のさすり仏の石と、前項(三)のト石・青石と、(四)および(五)の青石が同一品かどうかは証明するものが見当らない。しかし原色岩石図鑑(保育社S30版)には、緑泥片岩は俗に青石というと記載されている。前項の各資料の信頼性は区々だが、青石その他共通点があり、尚当地区には他に青石らしきものはないと古老もいっているので、同一の可能性は高いと考えられる。そこで同一品であるとすると次のようなことが考察される。

(1) 『古跡探』『防長寺社由来』の記述が信頼がおけるとすると、前項(三)『古跡探』が示す三社権現の勧請は、『防長寺社由来』徳山村本宮権現の項に推古天皇弐年とあり、再建は同由来により応永年間と、都濃郡誌により弘治年間の二回。従って占う機会は三回あったと考えられる。異説があるにしても青石は瑞徴の石として古より信じられていた。昔は自然の石を信仰したのであるから、推古朝以前からこの石は実在したであろう。

しかし、さすり仏は自然のままではなく、人工的に敷石の上に立石がのっている。いつ誰が何の目的で現在の姿に施工したのであろうか。

(2) 石は古代信仰で神の依代とされてきたものがある。また、民間信仰として、

○防災(防障)外部からの疫神悪霊を防ぐ。

例:道祖神

○生産 生産のもとである水を湧かせる。また物を産むもと。

例:陰陽石

○治病 治病の祈願として、撫石・穴あき石・色に特色のある赤石・青石或は縞石等を祭り、または奉納する。

などの神秘的な霊力がこもるものとされている。

(3) 前項(二)の六部説については、六部即ち六十六部は修行の過程で、人間の死後の菩提を弔うところに真意があったので、巡礼ほどには街道での一般人の接待はなかっただけ厳しく、回国の道中に行倒れになる率も高いといえる。また死・病に対し民間信仰療法的なものをもちあわせていた。従ってその言動は庶民から畏敬の眼でみられ、石に対する治病の信仰とも結びつき易い。しかしこの意味ではむしろ加持祈祷等を行う修験者・山伏が有力で、六部でなくてはならぬ理由はないが、平俗的に当時六部が盛行しているから厳密には区別せずに伝えたものと考えられる。

(徳山地方郷土史研究第三号 谷井秀「旅の中の宗教」を

参照せられたい）

(4) 浦石の街道筋については、徳山藩の承応元年（一六五二）の城下屋敷割のときにははっきりしている。それ以前は、前項(三)「古跡探」（古跡探が信頼できるとすると）によれば、道はあったが、ほぼ現在のような真直な道は、天樹公＝毛利輝元により文禄年間（一五九〇頃）に造成されたこととなる。以前から既に野上市が立っていたことが知られるが、往還はどこを通っていたかその位置はわからない。徳山藩領絵図（徳山市立図書館叢書　第十七集　筆写年不記）によると、徳山を通過するには平原～一ノ井手の山道と、新宮（地下上申絵図から推算すると、東川の往還橋＝現在の揚柳橋から川下約二〇〇米）～本宮の海岸道があり、(三)に中道とあるような、後の往還即ち現在の松保町～速玉町の通りが文禄年間にできたようだ。新往還は(三)「古跡探」にあるように軍事目的で造られたのであるから、当座は一般使用はできなかったであろうが、後には一般に開放され、六部もここに到着したであろう。いずれにしても旧往還は問題の青石とは無関係のようで、青石は旧往還筋に位置していない。従って青石は卜石としての機能しか果していなかったのではないだろうか。前項(二)の六部供養説がおこるとすれば文禄以降のこととなりそうだ。

(5) 前項(五)「徳山藩史」の享保十四年（一七二九）といえば、徳山藩再興から十年後である。恰も三～四年前から大旱魃等による凶作が毎年続き、庶民は窮乏していた時である。このような時期はとかく色々の風評が飛び交い易い社会背景の中で、急に治病の効能が吹聴されていった。

往時の道幅は、後年の資料であるが市街地の橋本町で約五米（御領内町方目安）、本往還筋では久米の石橋幅は約二・二～二・四米、土橋幅約三・六米、戸田の土橋幅は約二・七米（風土注進案）が公称で、実際は若干狭かったという。この道幅に青石詣りで突如一日七～八百人、一時間当り七～八十人が往復したことになる。更に山陽道を上り下りする旅人・駄馬等も通る。治病の祈願にはかしこまり、時間も場所もとり、動作も緩慢であるから混雑をきたしたであろう。賽銭賽米（散銭散米）も盛上ったであろう。遂に往還筋のこととて藩政府が保安要員を設けたことがわかる。

しかしこの状況はいつ迄続いたか、その後の状態がわからないが、前項(四)地下上申による青石の位置は、ほぼ現在地へ移転前のさすり仏の位置に合致している。多くの参詣人で賑わってから約二十年後に報告された地下上申の遠石村の項には、おんぼう塚・苗打松の伝説でさえ記述されて

いるのに、あれ程有名になった青石がのっていない。ただ路傍の村境目印という感じの青石としか扱っていないのである。どうしたことであろうか。

(6) 更に前項(五)「徳山藩史」では、多数の人が治病の祈願をするようになった理由や祭神も「格別之訳も不知。」また「色々病人」となっていて足の治病とはなっていない。万病が対称のような報告である。またその方法も撫石かどうか、ただ祈願となっている。公の記録だから抽象的に記述したのであろうか。

(7) 前出(2)の撫石は疾病箇所を撫でて治癒祈願するのが一般である。旅人の側から考えると少し先に徳山宿の入口下馬所（現在の揚柳橋の東側）が、松原を通して見える。しばし石仏の袂で腰を下し、今日一日の旅の安全を仏に感謝し、痛む足を撫で休め、乱れた旅装を整える格好の場所であった。即ち(2)の防災＝道祖神・治病の意味があったであろう。

四

以上のようにさすり仏とは何かを明らかにしようとしたが、むしろ疑問点を多くし、結局極め手は得られなかった。

しかし、推測の域をでないけれども、さすり仏は古くは神聖視された石であったが、中近世に及んで人口増・交通量増・信仰の推移等の時代背景と共に、前項のいくつかの事が何時の間にか重なり脚色されて、治病特に足が治るということになって伝ったのではないだろうか。

さすり仏は、交通量の殊の外激しい青山交差点の一隅に、今日もひっそりと佇んでいるが、気付く車は殆んどない存在である。しかし、さすり仏（石）の名の通り石の頭はいつもピカピカに輝いており、現在でもなお地区民や足の不自由な人達の熱心な信仰に守られて供花の絶えることがない。

付記：調査には、徳応寺赤松尚爾住職、松村章、大林清次、山本三男の各氏をはじめ旧東松原地区の多くの方々の協力に負うところが多い。謝意を表します。

参考文献

龍谷大学「仏教大辞典」
大塚民俗学会「日本民俗事典」
大塚史学会「郷土史辞典」
庚申懇話会「日本石仏事典」
和歌森太郎主幹編「日本民俗学講座」
桜井徳太郎共編「講座日本の民俗宗教」
桜井徳太郎「民間信仰辞典」
前田麦二画集「徳山の思い出」
徳山町役場（大正四年）発行「徳山市街図」その他